

第二部 イスラーム・ジェンダー学が目指すもの

「イスラーム・ジェンダー学と公正へのアプローチ—intersectionality と新しい人文学」（長沢栄治）

後藤：お時間になりましたので、第二部に入りたいと思います。第一部では、イスラーム・ジェンダー学科研が辿ってきた軌跡をお伝え出来たかと思いますが、第二部では「イスラーム・ジェンダー学」という名称の生みの親である長沢栄治先生に、イスラーム・ジェンダー学についてのお考えや今後のことについてお話をいただきたいと思います。長沢先生、どうぞよろしくお願ひいたします。

長沢：どうもありがとうございます。第一部でみなさんが素晴らしい発表をされました。森田さんが多様性についてお話をし、鷹木先生が人類学者の立場から「境界を超える」という提起をされたりとか、服部先生が教育学者として他者の介入なども含めて奥の深い話をされて、鳥山さんがチャレンジングな「分断」ということから、インターフェクショナリティとは果たしてそうした被差別経験がある人にとって分断というのは語れることができることであったりとか、岡さんが「自分らしく生きるために」ということをフェミニズムの問題として提起されました。そこでサバルタンの女性たちとフェミニズムをリードしてきた女性たちの問題—これはかなり根本的な問題ではあります—として一つお考えになられたのだと思います。

さて、イスラーム・ジェンダー学についてですが、2015年3月に明治大学で行われた公開シンポジウム「イスラーム・女性・ジェンダー」というものがあり、これを一回きりで終わらせてしまうのはもったいないということで、新年度の科研費でイスラームとジェンダーで何かやってみようということになりました。

本日は、「イスラーム・ジェンダー学と公正へのアプローチ—intersectionality と新しい人文学」というタイトルでお話ができればと思っています。インターフェクショナリティという概念と、エドワード・サイードが言った「新しい人文学」というものを合わせたようと試みたものが本日の内容になります。

こちらに『イスラーム・ジェンダー学の構築に向けて』というタイトルの冊子がありますが、これは2016年にキックオフ・シンポジウムを開催した時にその時の成果をまとめたものです。この中のプロジェクトの概要・趣旨のところでは「『イスラームとジェンダー的公正』の問題を軸として」と書いてあることから、当初から公正の問題を追及しようという目的があったのだということを今更ながら思いました。

それから、第1回全体集会（2016年6月11日）で「イスラーム・ジェンダー学」について説明をしたものがこちらの文章です（資料1）。

◎ナカグロ「・」論で夢を語る

第1回全体集会(2016年6月11日)開会の言葉・趣旨説明

「イスラーム研究の一部ではない…・ジェンダー研究の一分野でもない…独自の広がりをもった学問領域…イスラーム地域や中東に関する地域研究でもない」

このようにIG学がイスラーム学でも、ジェンダー学でも、地域研究でもないというのであれば、いったいIG学とはいっていい何なんだ、ということになります。

ここで注目していただきたいのが、「イスラーム・ジェンダー学」のイスラームとジェンダーの間に置かれたナカグロ「・」の意味であります。これは、ダブルハイフン「=」やスラッシュ「／」ではない、ということです。つまりIG学は、既存のイスラーム学とジェンダー学を「結合」させたり「融合」させたりすることを目的にしているわけではない、ということです。

ここでいうナカグロ「・」が持つ重要性とは、イスラームとジェンダーの間に何かあるものを入れてみる、それによって新しい研究の「風景」が開けてこないか、ということです。

たとえば、常識的なレベルでいえば、「・」に「国家」や「資本主義」を入れてみてはどうでしょう。「イスラームと国家とジェンダー」という問題設定を立てれば、ただちにいくつかの研究課題が浮かんできます。「国家フェミニズム」とか「家族国家観」などがそうでしょう。その場合、IG学の最終的な学問的目標にしたいのは、イスラームとジェンダーの間にこの国家という「・」を入れることによって、近代国家に関わる本質的な問題がどのように見えてくるか、ということになります。

私自身はイスラームの研究者でもないですし、ジェンダーを研究してきたわけでもありませんし、必ずしもこの研究は地域研究でもないと考えています。では、イスラーム・ジェンダー学は、イスラーム学でもジェンダー学でも地域研究でもないとしたら一体何だろうということで、「イスラーム・ジェンダー学」の「・(ナカグロ)」の意味を考えてみたいと思います。ナカグロ部分に何を入れるかということ、それによって新しい風景が見えてこないのかということを言ってみました。本日はこの部分についても少しお話をしようと思います。

「イスラーム」と「ジェンダー」という言葉の組み合せに心を惹かれる、魅力を感じるものがあるという気がします。その理由として、まずは「公正」という問題が中心に据わっているのではないかということです。イスラームとジェンダーの組み合せによって、「公正」や「正義」(アラビア語で「アドル」)は何かを問うというよりは、まず現代世界が直面する「不正」や「不正義」(アラビア語で「ズルム」)をどのように正していくことができるかというのが重要で、それにどのような視座を提供することができるのかという直感があったように思います。そして、イスラームとジェンダーがそれぞれ現代世界でもインパクトの広がりと、その両者の関係性の中で掘り起こされる問題があるのではないかという直感があります。イスラームとかジェンダーとか、あるいは他の専門家の狭いスコープ(単軸 single axis)的な考察には限界があると思っていますので、複数の視角(複軸 multiple axes)的な方法によって何か見つけられるものがあるのではないかと思っています。最後に、イスラームとジェンダーというと、我々が連想するのはオリエンタリズムの問題です。エドワード・サイードが晩年を通じて研究

していた新しい人文学の可能性、近代ヨーロッパ中心の人文学 Humanities/Humanism に対して、オリエンタリズムを乗り越えた人文学を作ろうという試みとイスラーム・ジェンダー学はどのようにつながっていくのか、という直感がありました。

さきほどの問い合わせにおいて「・」についての「本質的な問題」が問われるとともに、「・」をめぐる関係性に焦点を合わせて、現代世界が直面する不公正の問題を明らかにできるのではないか。たとえば、「・」に女性をめぐる暴力を入れて考えてみれば、DV から国家的暴力を中心とする国際政治の問題までが想定されます。このとき一つの設問として「なぜイスラームとジェンダーを利用して女性に対する抑圧や暴力が正当化されるのか」という問題があります。2022年9月16日に亡くなられたイランのマフサー・アミーニーさんの事件については「女性・自由・命」というスローガンが掲げられていますが、おそらくブラック・ライブズ・マターと関係していると同時に、2011年にアラブで起きた「パン、自由、公正」というスローガンとも似ているのでどちらとも関係しているのかと思います（この点については長沢栄治「なぜ「女性、自由、命」なのか—中東における変革の可能性を考える」『季刊アラブ』2023年冬号（2023年1月）を参照）。そういう問題を含めて、イスラームとジェンダーを利用して女性に対する抑圧や暴力がどうして正当化されるのか、ということです。アフガニスタンで最近ひどい事件が起きましたけれども、いずれにしても外部からの軍事介入勢力、イスラーム主義勢力の双方ともイスラームとジェンダーを利用するという点では結託しているという関係があるのではないか。さらに国家もそれに結託しているのではと考えることができます。

「・」に国家を置いた場合、「国家フェミニズム」などの問題を通じて、そのポストコロニアルなイスラーム地域における国家の性格が明らかになるとともに、他のアクターと国家との関係性も明らかになるのではないか。これについては次の論考で示しています。（長沢栄治「イスラームと「ジェンダー的公正」をめぐる問題を考える」『歴史地理教育』2021年8月号）この論考では、中東において国のかたちを作ってきた三つの動き、すなわち①域外からの介入、②国家エリートによる上からの改革、③土着的な（イスラーム的）秩序を作ろうとする下からの動き、に照応しています。これらは、表面上は対立・対抗しているように見えて、三者は共生・結託関係にある、ということです。シリア内戦において、これら3つの動きが猛烈な暴力を市民に及ぼしました。すなわち①では欧米やロシアのみならず域内大国（イラン、トルコ、湾岸諸国）も入り乱れての軍事介入や軍事支援（②や③に対して）、②アサド政権による住民虐殺、③IS や他の国外からのイスラーム主義武装勢力の参入です。他の国でもそうですが、これらの勢力がアラブの民衆蜂起の革命を結託してつぶしてきたと言えます。

そういうことが、イスラームとジェンダーの視点から見ることによって三者の関係性や結託関係が見えてくるのではと思います。一見すると対立するもの、かけ離れたものの間の関係性、結託関係の意味を考えることです。これに対して公正をめぐる戦い、あるいは不公正を正そうとする闘いもまた連携・連帯しなければならない、ということです。

ここで取り上げなければならないのが、「インターフェクショナリティ」という概念あります。キンバリー・クレンショーという法学研究者がインターフェクショナリティに関して研究を行っています。彼女は、暴力の問題、黒人女性に対する抑圧の問題を、人種と性の関係から考察しています（資料2）。

資料2

II. INTERSECTIONALITYとIG学

◎暴力を「人種」と「ジェンダー」との<関係性>によって考察する

キンバリー・クレンショーのintersectionalityに関する古典的研究

第一論文 Kimberle Crenshaw 1989 : “Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics”

(University of Chicago Legal Forum, Vol. 1989: Iss. 1, Article 8. pp.139-167)

第二論文 Kimberle Crenshaw 1991 : “Mapping the Margins: Intersectionality, Identity Politics, and Violence against Women of Color” (Stanford Law Review, Vol. 43, No. 6 (Jul., 1991), pp. 1241-1299)

◎Intersectionalityとは何か

第一論文タイトル「人種と性のintersectionを脱周縁化=主流化する」

重層的な重荷を背負ったmultiply-burdened黒人女性に対する雇用上の差別

の事例に対して

従来の単軸的分析・枠組みsingle-axis analysis/framework [人種とジェンダーを

相互に排他的なカテゴリーとして扱う] の限界を指摘する。 (I :139-40)

複数の視角の組み合わせから問題に迫る (=複軸multiple axesの方法?)

ここに示した第一論文では「人種と性のインターフェクションを脱周縁化=主流化する」ということを述べています。この場合、黒人女性への差別を事例にして研究しています。先ほど言いましたように、彼女が強調するのは、従来の単軸的分析・枠組み一レイシズムの問題、もしくはフェミニズムの問題、それだけではなくてそれらを組み合わせていく、ということです。人種とジェンダーの問題がそれぞれ排他的なカテゴリーとして扱われている、そのことの限界を指摘しています。そして、複数の視角の組み合わせから問題に迫ることを提案しています。

日本語の場合、「インターフェクショナリティ」「インターフェクショナル」「インターフェクション」といった言葉は「交差」と訳されています。彼女は第一論文の中で、「人種差別という一方通行、性差別という一方通行、その道路が交わる場所に立っていた黒人女性が事故に遭う、その場合彼女が負った傷はいずれによっても救われない」という例えをしていることに関係しているのかと思います。ですが日本語の場合の「交差」という訳語では、二つの差別／抑圧が内側で相互に結びついている（「すれ違っている」わけではない）ことを見失わせる恐れがあるのではないかと思います。

彼女の論文の中で「インターフェクショナリティ」「インターフェクショナル」「インターフェクト」という言葉がどんなふうに使われているのか検証しましたところ、①経験や従属などの表れ方、②救済やニーズなどの認識と行動、③差別や抑圧をする側の結託関係、の3つの用法があるかなと思います。重要なのは、分析だけの視角ではなく、連帯行動のための手段としてインターフェクショナリティがある。なぜ

ならば抑圧する側もインターフェクト（結託）しているからである、ということです。

また、関係性と権力あるいは代表性の問題として、人種差別と性差別の重複状況の分析において特権集団の経験が基準となってこれらの問題が議論されてきました。フェミニズムにおける白人中流女性、反レイシズムには黒人男性のヘゲモニーがあります。黒人女性は周縁化されていくような状況があったとクレンショーさんは述べています。さらにその上には権威主義的な白人男性の普遍的な声というものがある、ということです。

2022年8月15日の東京新聞には、遠藤謙さんという義肢装具のデザインの会社を経営している方ですが、乙武洋匡さんの歩行を助ける時に考えたことが、健常者をデフォルト（基準）と考えない、「補完」とか「拡張」という考え方もない、「欠けている」 ⇔ 「全てある」という二項対立的な見方も排除して人間の可能性を追求することだったそうです。健常者をデフォルトにするような形で義肢を作ることに対して問題点を投げかけていて、非常に興味深く、まさにその通りだと思いました。これは、特権層＜マジョリティ＞の経験がデフォルト＝基準となって通用していると指摘しているよい例だと思います。

クレンショーさんは＜暴力・人種・性＞における四者の関係（白人男性・白人女性・黒人男性・黒人女性）の例を挙げて、この関係性の枠組みにおいて黒人女性に対する性暴力は過小評価され、黒人男性による性暴力は過大評価される、と第二論文で指摘していますが、ここで家父長制の問題が出てきます。＜暴力・人種・性＞を＜暴力・レイシズム・家父長制＞という関係性と捉えることによって権力関係という問題に焦点を合わせてインターフェクションの問題を論じようというわけです。そこでは白人社会の正しい家父長制（紳士的な男性と貞淑な女性）と、抑圧されて家父長制が危機に瀕している黒人社会（暴力的で野蛮だが実は弱い男性と性的に放埒な女性）を対置する見方が批判されています。この関係性はまさに西洋社会と非西洋社会（イスラム社会）の図式における偏見の構造によく似ています。

インターフェクショナリティは、人種問題や性差別の問題だけではなくて、もっと拡張して使えるのではないかということをクレンショーさん自身も言っています。第一論文の中に出でてくる「地下室の例え」があります。「人種、性別、階級、性的嗜好、年齢、身体能力によって不利な立場に置かれているすべての人々を集めた地下室を想像してください」とい、地下室の上層部には一つの差別しか受けていない人がいて、下層には複数の差別を受けている人たちが押し込められているといいます。そのばあい、上層部にいる単一の差別を受けた人から救い出されて、底に近い方にいる複数の差別を受けた人ほど最後まで取り残されるという状況があるとしています。すなわち、差別の問題を人種やジェンダー以外のカテゴリーに拡張するということが述べられています。この点を第二論文では「虐待やレイプが、私的な＝家庭内の問題や異常な性的攻撃ではなく、女性に対する支配のシステムとして認められるようになった。女性を一つの階級 class として認識するこの発展は、アフリカ系アメリカ人、他の有色人種、ゲイ、レズビアン、など他の差別を受け、孤立してきた人たちのためのアイデンティティ政治の問題に拡張することができる」と具体的に述べています。

BLM（Black Lives Matter）とパレスチナ問題（BDS: Boycott, Divestment, and Sanctions）と言っているのがアンジェラ・ディヴィスさんです。この方は自身の著作『アンジェラ・ディヴィスの教え　自由とはたゆみなき闘い』（浅沼優子訳）河出書房新社2021年（原著：Angela Y. Davis, *Freedom Is a Constant Struggle: Ferguson, Palestine, and the Foundation of Movement*, 2016）の中で次のように言っています。闘争におけるインターフェクショナリティの概念化について、「当初、インターフェクショナリティは身体

と経験にまつわるものでした。しかし今、国境を越えた様々な社会主義の闘争をひとまとめに語るにはどうしたらしいでしょうか。ファーガソン〔2014年8月マイケル・ブラウン射殺事件〕とパレスチナの話をしてきましたよね。では、どうすればこれらの問題を共に考え、共に組織化するような枠組みを本当に作ることができるでしょうか？」(64-65頁)

パレスチナ問題ということについても、多角的な視角が必要であるとか、それがアメリカ国内の刑務所解体の問題とどう関係するのかとか、闘争においてもブラック・フェミニズムや有色人女性フェミニズムは、パレスチナ人やパレスチナ人フェミニストの闘争から学ぶことができる、などのムーヴメント間のインターフェクショナリティ（連帶）を主張することが重要である（72頁）と言っています。一方、死刑の問題はレイシズムの問題であるとか、人種差別の問題の上にムスリム差別が強化されていく、というような形で、そうした抑圧の関係についてもインターフェクショナリティという言葉を使っています。ほかにも、アメリカの警察の訓練とイスラエルの警察や軍隊の間の関係なども指摘されています。

ただし、先ほどから述べてきましたように様々な抑圧や差別が実は裏で結びついていると言っても、それがどのように繋がっているのかについてはなかなか明らかにできることではありません。単一の原因=「全体化する理論」などで説明できるものではありません。これについてはクレンショーさんも論文の中で次のように述べています。「インターフェクショナリティは何か新しい、全体化するアイデンティティ理論 totalizing theory of identityとして提供されるものではない」（クレンショー II:1244）。

ここで、議論の話の流れを別の方向に転じたいと思うのですが、ハンナ・アーレントの『全体主義の起源』に触れたいと思います。この本の緒言のなかで、彼女は「全体主義をその要素や発生原因と単純に同一視する傾向」を批判します。「あたかも反ユダヤ主義もしくは人種差別論もしくは帝国主義のすべての爆発が、〈全体主義〉としてすべて同一視できるかのように」見なすこの傾向を批判しています。単線的な「因果関係」では説明できないということです。彼女はさらに、反ユダヤ主義・帝国主義・レイシズム・全体主義などの相互の複雑な関係を読み解くためには、植民地主義・国民国家・ナショナリズム・汎民族運動・資本主義・官僚制的行政組織・モップと大衆など、一見すると相互に関係を持たないよう見える諸問題が結びついて最終的には全体主義とホロコーストという破局を導いていく過程を描くわけです。それをどう捉えていくのかということです。様々な問題がインターフェクションしても、それがどのように結びついていくのかを明らかにする必要がありますが、そう簡単に描けるわけではないことが、全体主義の考察の事例からも明らかです。「ユダヤ人問題あるいは反ユダヤ主義が、ユダヤ人とは関係のない、しかし世界情勢で重要な役割を果たす諸問題と結びついていく」「反ユダヤ主義が表面にあらわれない目的に利用されていく」ということも指摘しています。

『全体主義の起源』という本は、第1部では20世紀の反ユダヤ主義の帝国主義的な型と全体主義的な型、第2部では全体主義的な型が議論されるわけですが、では、現在、反ユダヤ主義はどのような型をとっているのか。反ユダヤ主義が全体主義の発生の重要な要素の一つであったとするなら、パレスチナ問題もまた反ユダヤ主義が生み出したシオニズムを重要な要素として展開しているわけで、この問題の解決を考えるに当たっては、全体主義の問題と同様にインターフェクショナリティという視点から考察している必要があるのではないかとも考えるのです。

そこで結託関係の行動としてのインターフェクショナリティを考察するために、何にでも通用する全体化理論はないし、究極的絶対的な原因があるわけではないと思います。その場合にどのようなアプローチが可能で、大事にしたい視点とは何かといえば、再びクレンショー第一論文に戻りまして、経験とし

てのインターフェクショナリティという問題を考えなくてはいけないということです。この論文でクレンショーさんは「二重の差別という経験は単なる人種差別と性差別の合計 sum ではない」(I : 149)と述べています。この場合、何よりもインターフェクショナルな経験（経験が重層的な差別経験としてインターフェクショナルな性質を帯びている）を出発点において、ボトムアップの概念形成をしていかなくてはいけない。しかし、一般に通用しているのは強者の、マジョリティの、トップダウンのアプローチである、「特権層の経験がデフォルトとされるかぎり、多重な抑圧／差別を受けている intersectional な経験は可視化されない」(I : 167)と言っています。ディヴィスさんは「個人的なことは政治的なこと (The personal is political) というフェミニズムの古いスローガンを真摯に受け止めること」(196 頁)、「私がやってきたことは、人種問題、階級問題、ジェンダー問題がそれぞれ切り離すことができないという感覚を、個人単位の分析ではなく、ムーヴメントや集団的活動の中に反映してきたことだ」(63 頁)と言っています。これは、個々人の経験が集合的な経験、マクロな政治社会現象、カテゴリー=運動の主体（たとえば、有色人女性、アイデンティティ政治において）となるような形で顕在化することが重要だと言っています。

ここでまた先の議論に戻りますが、もう一つの経験としてのインターフェクショナリティの意味がある、離れた場所、違う境遇にいる個々の差別の経験が相互に関係している、というわけです。それが、複数の経験がインターフェクトしているけれども、それが結びついていることが可視化されていない。様々な差別を受けた経験の間だけではなく、抑圧者の経験と被抑圧者の関係も考えなくてはなりません。表面上は関係ないように見える諸経験が折り重なって歴史を形成している。抑圧者（特権的集団）の経験と被抑圧者の経験がすれ違いあいながら、知と権力の支配構造（オリエンタリズム）が再生産される。これが、エドワード・サイードが研究しようとしたことです。「対位法」という方法論を使ってそれを読み解こうとしたのが『文化と帝国主義』という本です。対位法的なパーステクティヴによってインターフェクトしている経験の関係性を明らかにする、それによって異なった経験の間の関係を変革する「修復的正義」の可能性、オリエンタリズムを越える新しい人文学の可能性を求めていったのではと思います。

エドワード・サイードは彼が求めていた新しい人文学とは何かということについて、『人文学と批評の使命—デモクラシーのために (Humanism and Democratic Criticism)』(村山敏勝・三宅敦子訳：岩波書店 2006 年) という著作の中で、「いま始まろうとしている人文学がそこにある」(4 頁) と述べています。「わたしの関心は、実際に使える人文学、自分がなにをやっていて、学者としてなにに義務を負っているか知りたいと願い、その原理を自分が市民として生きている世界につなげたいと思っている知識人や研究者にとっての人文学にある」(9 頁)「人文学と人文主義は、本質的に見直し、再考し、活性化される必要がある。これらはいったんミイラ化して伝統になってしまえば、本来の姿ではなくなり、崇拜や抑圧の道具となるからだ」(40 頁) として、「崇拜や抑圧の道具」ではなく、「市民的実践」としての人文学を再生しなければいけないという課題をサイードは掲げていました。

これまでの経緯を見ますと、『オリエンタリズム』では近代西洋人文学の一分野としてのオリエンタリズムを批判し、『文化と帝国主義』では、批判の継続とともに、そのオルタナティヴ=新しい人文学の可能性を示そうとしました。「新しい人文学」とはヨーロッパ中心的な人文学／ヒューマニズム（普遍主義・リベラリズム）を批判し、オルタナティヴへの方向性を提示しようとするものでした。『人文学と批評の使命』という本の中では、「『他』の伝統があり、したがって他の人文学もある」ことを認めることから始めることを提案しています(6 頁)。『文化と帝国主義』(原書viii :邦訳 I -3 [大橋洋一訳 : みす

ず書房 2001 年]) では、「植民地化された人々が、自らのアイデンティティと自らの歴史の存在を主張する手段」となる物語、他者の物語の形成や出現を阻もう (viii : I - 4) とする勢力を打ち破って物語る力を持つようになるのだと。他方「西洋人であっても、実質的に、文化の壁を突き抜けて彼方へと言った芸術家や知識人」がいたし、「帝国主義にとってかわるオルタナティヴを、又とりわけ西洋以外の文化や社会の存在を、真摯に考えようとする政治姿勢」をもって (XX ii : I - 16) いたのだ、と。また、「異なった文化的主体の間で今や「国境 [→境界線] を越え、紋切り型 [→既存の類型] を越え、民族を越え、本質を越えて形成される、あらたな連携関係が急速に生まれつつある」(XXXviii : I - 24) ということを言っています。

人文学者は何かということを考えた場合、人間／人間性とは何かを問うことは、他者との関係性を問うことにはならない。自分を問うとともに他者との関係、人間同士の関係はいかにあるべきかを問うのが人文学者であろうと思います。それは社会科学などを含むものであるし、自然科学に対する責任を有することだと思います。

その場合に重要なのは、「経験」のもつ意味ではないでしょうか。サイードは『オリエンタリズム』のなかで繰り返しテキストに基づいた態度=テクスチュアルな姿勢を批判しています。これについては省略しますが、それとともに、他者の経験に対する態度として対位法の実例を示しています。「19世紀のイギリスにおける戴冠式とインドの公式接見とのつながり」や「キプリングの『キム』とインド独立運動」などの実例を挙げています。「かけはなれたように見える経験が、それ独自の将来像なり発展速度をもち、それ独自の内部構造をもち、それ独自の内的首尾一貫性と外的関係システムをもちながら、同時に、それらすべてがたがいに共存し作用しあっていること」(36 : I - 81) とか、「異なる経験をたがいにつきあわせ、はりあわせることによって、ふつうならイデオロギー的あるいは文化的な制約によって、たがいに無関係なままで終わってしまうか、たがいに距離をとり抑圧しあうだけの、見解なり経験を、同時に共存させるというのが、わたしの解釈の政治的（広い意味での）目的である」(37 : I - 81)、「乖離した〔すれ違っている *discrepant*〕ものが平行関係にあることをあばき、それを劇的に強調すること」(36 : I - 81) だと言っています。一見するとすれ違っている／無関係に見える経験や他者の経験を理解できないでいる、理解しないことですませているというのは、そのままでは他者の異なる経験を低い地位へと追いやりことになる (80 : I - 36) として、これは帝国主義における抑圧者と被抑圧者の関係やジェンダーにおけるマジョリティとマイノリティの関係もそうだろうと思います。どうしてそんなことができるのかと言えば、そこには決めつけと思い込みがあるのだろうと思います。相手を非人間化、擬人化するような態度につながっていくということです。

そして、サイードに見えていた「人文学者」の世界ということで、彼が人文学者をどう考えていたのかと言えば、彼は音楽のセンスに溢れた人で、『文化と帝国主義』のなかで音楽的な用語を使って次のように述べています。「人類 mankind は、みごとな、ほぼ調和のとれた [→交響楽的] 全体 symphonic whole をかたちづくり…」(50 : I - 100)。そのほか、テクスチャは肌理（きめ）というよりも音色（ねいろ／おんじょく）、あるいは「対位法」contrapuntal [複数の旋律を、それぞれの独自性を保ちつつ、互いによく調和させて重ね合わせる技法] もその一つで、こういったものが人文学者にはあって、それを再生することが彼にとっての課題だったと言えます。「さまざまな経験を対位法的にながめ、そこに、からまりあい重なりあう歴史一とわたしが呼ぶもの一を見いだしながら」(19 : I - 56) と言っていますが、これを解釈すると、「個々人の異なった「経験」を対位法的に考察するということは、〔それらの経験を代表

する集合的な経験が織りなす] 複数の歴史の絡まりあいを分析すること、となります。

サイードは「エマニュエル・カント以来の人文学の在り方は、文化と経験の領域を分断してきた。それが西洋の経験の本質と化している。」(『文化と帝国主義』123: I-68) ということも言っています。ゆえに、新しい人文学においては文化と経験の領域を再統合しなければいけない、ということを言っているのだと思います。そして、この統合がオリエンタリズムの克服と深く結びついている、と。抑圧者と被抑圧者の経験を対位法で描くことによって公正な世界に導くことができるのではないか、と、非常に簡単にまとめればこのようにいうことができると思います。ただし、いくら革命を起こしても被抑圧者が新しい抑圧者になるということはいろんな例（民族ブルジョアジーによる専制国家や原理主義など）からみえてきましたし、一つの不公正を正すことが、もう一つの不公正を生み出すこともこれまでたくさんありました（市民革命・社会主義革命など）が、それはサイードの批判するところの構造自体が根本的に変革されていないことからきているのだろうと思います。エドワード・サイードのこの新しい人文学の議論とインターフェクショナリティの議論を接合して何か議論ができるのではと考えています。

最後にまとめとして、インターフェクショナリティとは、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師の「いかなる場所の不正も、あらゆる場所の公正への脅威となる」という有名な言葉とも関係する重要な方法論的概念だということを言っておきたいと思います。どこかで不正があると、それは他の場所の公正の脅威になっているので、そういう不正は正さなくてはいけない、という問題意識です。また、新しい人文学とIG学の課題というところでは、「イスラーム・ジェンダー学」の「・(ナカグロ)」にオリエンタリズムを入れる、あるいは不公正としてのオリエンタリズムを考えることになるのだとも思います。

多くの積み残し問題もあります。特に、イスラームという問題を議論するときには世俗性の問題をどう考えるか、ということです。サイードは『人文学と批評の使命』で「人文学の力と重要性は、民主的で世俗的な、開かれた性質からきている」(26頁) と言っていますが、この場合、世俗的なものをどう考えるのかということは非常に論争的なテーマです。また、人文科学と社会科学・自然科学という「二つの文化」の分断状況をサイードは批判していますが、それも新しい人文学の課題になると思います。最後になりますが、加々美光行氏が『鏡の中の日本と中国』という著作の中で、客観性を装った「実験室内」の研究ではなくて目的論的な価値判断と「認識の客観性」こそが重要であると述べています。この意味で、イスラーム・ジェンダー学は目的論的な価値判断をもって行ってきた研究ではないかと思います。その場合、公正とは何かよりも、不公正をいかに正すか、その原因とはどこにあるのかということを個々の人の経験に基づいて—歴史学であれ、フィールドワークであれ—、ボトムアップで進めてきたということはたとえばIGシリーズ本のなかでも貫かれていると思います。本日のお話は政治的なものに偏っているところもあるかもしれません、日常の些細な問題を含めて、公正を求めて議論を続けていけたらと思っています。

以上で終わりとさせていただきます。どうもありがとうございました。

後藤：長沢先生、どうもありがとうございました。公正を語るのではなく、不公正はどこにあるのかということを人々の経験から見ていくということで、IGシリーズ本の内容がまさに今つながったと感じました。

同時に、難しい内容でもありましたので、皆さんのなかから質問やコメントなどをいただきたいと思

いします。・・・それでは、鳥山さん、お願ひします。

鳥山：ありがとうございます。サイードの議論では、もちろん彼はわかって挑発的に書いていると思いますが、どうしても二項対立的な関係が目立つように思います。そうすると、私たちはつい自分を強い方に置いてしまって、弱い者に対して公正を目指してあげる、のような心持になってしまいがちなのはと思いますが、その点については問題を感じてはいらっしゃいませんか。また、今後はサイードの議論をどこまで見習い、そしてどのようになるのか、この点について思うところがありましたらご教示ください。

長沢：運動の問題としては、アンジェラ・ディヴィスが言っているように「リーダーなき運動」というのがこれから生まれつつあるのだと思います。また、私たちは研究者として、特権的な立場にいる私たちが何をすべきか、ということで、そうした目的意識を持たなくてはいけないと思います。それが、無知な人達を導くのだという態度ではないと思います。

また、今後、サイードの議論をどこまで見習うかについてですが、彼が目指していたものは何となくわかる気がしています。それは明らかな社会認識、知と権力に対する眼差しが歪んでいるからで、特権をもった人たちや原因を叩けばそれでいいのかと言えば、たぶんそうではないだろうと思います。帝国主義や植民地主義の問題を克服していくためには、そうした問題に経験として捉えて取り組むことが重要なと思います。初めから理論で入っていくのではなく、経験から出発して正しい共生の関係を作っていくことが、サイードが目指そうとしていたことだと思いますし、それは IG 学でも目指そうとしているところです。

後藤：ありがとうございます。ここで基本的なお話を伺いたいと思います。ここ数年、インターフェクショナリティという概念を使って長沢先生は IG 科研を引っ張ってくださっていると感じましたが、そもそも長沢先生はどのようにこの概念に出会い、注目することになったのでしょうか。

長沢：アンジェラ・ディヴィスさんの本を読んで面白いと思ったのがきっかけです。関係性において問題を捉えていく、ここに根本的な悪があるのだ、というアプローチではなく、それがどのような関係性で成り立っているのかという見方が面白いなと思いました。例えば、抑圧する側が結託する場合がありますが、ではどうして結託するのか、どんなものが繋がっているのかというところを明らかにすることが必要なのかなと思います。

後藤：どうもありがとうございます。それでは、以上でご講演を終了とさせていただきたいと思います。
長沢先生、どうもありがとうございました。

本日は長い時間お付き合いいただきありがとうございました。私たちのなかでも、自分たちが何をやってきてどこに行きたいのかということを考える機会になりました。以上で公開シンポジウムを終了とさせていただきます。